

表4 I区出土遺物観察表(瓦類)

図取番号	出土地点	器形	全長	全幅	全厚	色調	特徴	備考
61	集石遺構	軒平瓦	(7.0)	(5.0)	2.0	内) 灰 外) 灰	チャートの粗粒砂を含む。瓦頭幅6cm。軒平瓦の瓦頭。周縁はやや高い素文縁で、内区に三巴文を飾ったものである。上帯ナデ、下帯には1条の沈線がみられ帯帯には面で強くナデな痕跡が残る。三巴の頭の先は尖っており、内高で尾が長い。包み込み技法。	
62	集石遺構	平瓦	(7.0)	(5.0)	2.0	内) 灰白 外) 灰	細粒砂を少量含む。凹面布目痕。凸面太い織維の圧痕。凸面側の角を面とる。	横出面№12
63	集石遺構	平瓦	(14.3)	(6.5)	1.8	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。凹面布目痕。凸面ナデ。凹面側の角面取り。	内
82	SE1	平瓦	(18.2)	(18.1)	1.7	内) 灰 外) 灰	細・粗粒砂を含む。凹面布目痕。凸面ナデ。凹面の短辺角は面取り。	内
106	SE1	丸瓦	(8.1)	13.1	2.3	内) 黒褐 外) 褐灰	精選された胎土。須恵器の焼成具合。凹面布目痕。凸面ナデ。凸面に自然軸。	2面目№1
107	SE1	平瓦	(8.7)	(6.9)	1.8	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。凹面布目痕。凸面ナデ。凹面側の角は面取り。須恵器のような焼成。	内
108	SE1	丸瓦	(17.2)	(12.7)	1.6	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。凹面布目痕。凸面ナデ。凹面側角は面取り。	2面目№3
109	SE1	軒平瓦	(6.7)	(11.2)	5.0	内) 灰 外) 灰	長石。チャート他の細・粗粒砂を多く含む。瓦頭幅約4.5cm、U字の隆帯を貼付並列して瓦頭文(側頭文)を形成する。包み込み技法による。	内
110	SE1	丸瓦	32.2	13.0	1.7	内) にぶい赤褐 外) 灰赤	尾幅9.5cm、頭幅13.5cm。粗粒砂を含む。須恵器のような焼成。凹面に布目痕。凸面ナデ。凸面尾端より4cm前後のところに重ね部の段がみられる。4-1mm。凹面にも尾端から7cm程のところに僅かな段が認められる。凹面側の角は面取る。	2面目№15・赤灰
111	SE1	平瓦	(7.5)	(15.9)	2.4	内) 灰白 外) 灰	精選された胎土。凹面布目痕。凸面ナデ。下地に叩きあり。他の平瓦より厚く滑面も強い。	2面目№17・赤灰
112	SE1	平瓦	(10.2)	(18.2)	1.9	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	砂粒をほとんど含まない。凹面布目痕。凸面ナデ調整。縦方向に染線が走る。	2面目№6
113	SE1	平瓦	(18.5)	(8.1)	2.0	内) 橙 外) 橙	細・粗粒砂を少量含む。凹面布目痕。凸面ナデ。	2面目№4
114	SE1	平瓦	(24.3)	(9.5)	1.7	内) 灰 外) 灰	細粒砂を含む。凹面側の角を5mm幅で面取り。凹面布目痕。凸面ナデ指頭圧痕により凹凸が認められる。	2面目№17・赤灰
115	SE1	平瓦	(19.5)	(15.4)	2.0	内) 灰白 外) 灰白	砂粒を少量含む。凹面布目痕。凸面ナデ。凹凸両面角は面取り。	2面目№14・赤灰
116	SE1	平瓦	29.5	21.0	2.0	内) 橙 外) 橙	チャートの小礫・粗粒砂を含む。凹面に粗目の布目痕(1-3mm)。凸面はナデ仕上げ。所々に指頭圧痕が認められる。凹面側角を面取り。	2面目№2・赤灰
117	SE1	平瓦	30.0	19.9	2.5	内) 赤橙 外) 橙	細粒砂を少量含む。凹面に目の粗い布目痕跡。凸面はナデ仕上げ。所々に指頭圧痕が認められる。凹面側角を面取り。	2面目№7・8
118	SE1	軒平瓦	28.9	19.7	2.9	内) 橙 外) 橙	チャート他の粗・細粒砂を含む。瓦頭幅4.5cm。瓦頭部に向かって両面に粘土を貼り厚くする。瓦頭文縁はU字状を呈する隆帯(側頭文)。平瓦よりも厚くつくられ、布目は凹面のみならず凸面にも認められる。凹面長側縁角は面取り。	
119	SE1	平瓦	28.1	20.0	2.1	内) 灰黄 外) 灰黄	細粒砂を含む。凹面布目痕+ナデ。凸面ナデ。擦痕も認められる。	
172	SK7	丸瓦	(18.4)	(6.7)	2.0	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。凹面に布目痕。凸面ナデ。側縁面をとる。	
173	SK7	丸瓦	(10.8)	(7.7)	1.8	内) 灰 外) 灰	チャート他の細・粗粒砂を含む。凹面に布目痕。凸面ナデ。	
174	SK7	平瓦	(8.6)	(6.9)	1.4	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。須恵器の仕上げ。凹面布目痕。凸面ナデ。	
175	SK7	平瓦	(9.4)	(7.3)	1.8	内) にぶい橙 外) にぶい橙	チャート他の細・粗粒砂を多く含む。凹面に布目痕。凸面純素文。	
176	SK7	平瓦	(8.5)	(9.2)	1.8	内) 灰 外) 灰	チャート他の細・粗粒砂を含む。凹面に布目痕。	
177	SK7	平瓦	(8.1)	(6.3)	2.3	内) 灰 外) 灰	細・粗粒砂を多く含む。凹面に布目痕。凸面ナデ。	
178	SK7	平瓦	(8.2)	(10.2)	1.6	内) 灰白 外) 灰白	チャート他の細・粗粒砂を多く含む。凹面に布目痕。凸面ナデ。	
179	SK7	平瓦	(12.4)	(12.9)	2.8	内) にぶい橙 外) 橙	チャート他の細・粗粒砂を含む。凹面に布目痕。凸面タタキ。	
180	SK7	平瓦	(16.5)	(10.2)	1.6	内) 灰白 外) 暗灰	チャート他の粗粒砂を含む。凹面に布目痕。凸面ナデ。側縁部面取りなし。	
251	SK16	軒平瓦	(14.8)	26.5	2.5	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。凹面布目痕。モコツ痕なし。凸面平行タタキ。瓦頭部に宝相華文。瓦頭長7.7cm、上幅2.7cm、下幅5.0cm。	
254	SD2	丸瓦	(11.6)	(9.7)	1.8	内) 暗灰 外) 暗灰	細・粗粒砂を含む。内面凹面布目痕。側面は面を取る。	
255	SD4	平瓦	(3.7)	(9.1)	1.4	内) 灰白 外) 灰白	細・粗粒砂を含む。凹面布目痕。凸面ナデ。	
261	SD2	平瓦	(7.2)	(5.4)	1.4	内) 黄灰 外) にぶい黄橙	凹面布目痕+ナデ。側面は面を取る。	
283	P3	平瓦	(9.1)	(14.2)	1.8	内) 暗灰 外) 灰	チャート他の粗粒砂を含む。凹面に布目痕。凸面ナデ。	
520	包含層	丸瓦	(9.4)	18.9	2.2	内) 灰 外) 灰	凸面ナデ。凹面布目痕。須恵器のような焼成。側面は面を取る。	
521	包含層	瓦頭	14.0	15.0		内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	チャート他の粗粒砂を含む。直径14×15cm。連珠三巴文。径9mmの珠文21個配置し、内側に巴文が施される。尾は長く、陶線に連する。	

表5 I区出土遺物観察表(木製品)

図版番号	出土地点	器種	全長	全幅	全厚	樹種	特徴	備考
120	SE1	井戸杵(隔柱)	53.5	10.4	7.6	ヒノキ科アスナロ属	2分割材(丸木)を使用。1面に丸木の素材面を残し、残り3面を平坦に削って成形する。木取りは他の3柱も同様である。井桁を支える四隅の柱のうちの1本であり、上端を杭の先端状に削り、尖らせる。上端より18~24cmの部位に短軸(2.6~2.8cm)×長軸(5.2~5.6cm)の長方形のホゾ穴を穿つ。ホゾ穴の深さは4~5cm。ホゾ穴はL字型に直行し、貫通しない。	杭1
121	SE1	井戸杵(隔柱)	50.8	7.7	6.3	ヒノキ科アスナロ属	井桁を支える四隅の柱のうちの1本であり、上端を杭の先端状に削り、尖らせる。上端より15~21cmの部位に短軸(2.5~2.8cm)×長軸(5.6~5.8cm)の長方形のホゾ穴を穿つ。ホゾ穴は内部でL字型に直行し、貫通しない。	杭2
122	SE1	井戸杵(隔柱)	45.0	8.9	5.5	ヒノキ科アスナロ属	井桁を支える四隅の柱のうちの1本であり、上端を杭の先端状に削り、尖らせる。上端より9~15cmの部位に短軸(2.8~3.2cm)×長軸(5.0~5.0cm)の長方形のホゾ穴を穿つ。ホゾ穴は内部でL字型に直行している。素材面のホゾ穴の延長線上に穴が開いた部分があるが、貫通を意図したものではない。	杭4
123	SE1	井戸杵(隔柱)	51.3	11.1	9.9	ヒノキ科アスナロ属	井桁を支える四隅の柱のうちの1本であり、上端を杭の先端状に削り、尖らせる。上端より15~21cmの部位に短軸(2.8~3.6cm)×長軸(5.2~5.8cm)の長方形のホゾ穴を穿つ。ホゾ穴の深さは約4cm。ホゾ穴の方向は直行するが、殺違いとなっており貫通していない。また、上端より8.7~12.5cmの部位に、1.7×3.6cmの平面長方形、深さ2cmのホゾ穴が残る。	杭3
124	SE1	井戸杵(横棧)	82.7	4.9	2.0	ヒノキ科アスナロ属	厚さ2cm・幅5cm程度の板目の板材であり、両端にホゾ穴に差し込んだ痕跡が確認される。両端を削って細く造り出している。板材の表面には鱗状の加工痕が観察される。	北側
125	SE1	井戸杵(横棧)	83.2	5.2	2.9	ヒノキ科アスナロ属	厚さ2cm・幅5cm前後の板目の板材であり、板状の木をそのまま差し込んだもの。板材の表面には加工痕が観察される。	東側
126	SE1	井戸杵(横棧)	73.5	5.3	1.9	ヒノキ科アスナロ属	厚さ2cm・幅5cm程度の板目の板材であり、両端にホゾ穴に差し込んだ痕跡が確認される。板状の木をそのまま差し込んだもの。板材の表面には加工痕が観察される。	南側
127	SE1	井戸杵(横棧)	63.7	4.5	3.1	ヒノキ科アスナロ属	厚さ3cm・幅4cm程度の板目の板材であり、両端にホゾ穴に差し込んだ痕跡が確認される。板状の木をそのままホゾ穴に差し込み、縦板を支える横板とする。	西側
128	SE1東側	杭	(21.9)	4.9	4.0	マツ科マツ属(二葉松類)	直径4.5~5cmの棒状の木の先端を加工し杭状に尖らせる。加工部以外は樹皮を残す。折れており、全長不明。	

表6 I区出土遺物観察表(石器・石製品・石鍋・土錘・鉄類・窯壁片 他)

国取番号	出土地点 層位	種類	器種 器形	法量 (cm)				色 調	特 徴	備考
				口径	器高	底径				
59	集石遺構	石製品	石鍋	1.5				黒灰	滑石製の石鍋。底部付近、5mm大の穿孔あり。外面黒色。内面は極微顕著。	
64	集石遺構	窯壁	窯壁片					黒灰	色調は黒～灰白。内外は海綿状を呈し気泡が多い。	
100	SE1	土製品	土錘	全長 5.1	全幅 1.4	孔径 0.6	重量 8.7g	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	砂粒をほとんど含まない。ナデ調整。両端面をとる。0.6cmの孔を穿つ。管状土錘。	2箇目出土
171	SK7	鉄	不明					橙	表面海綿状を呈する。	
252	SK16	窯壁	窯壁片	(9.2)	(4.5)				砂粒を含まない。中にモミ、ワラ状の圧痕。	
253	SK16	窯壁	窯壁片	(9.6)	(8.3)				砂粒を含まない。中にモミ圧痕が多くみられる。粘接性を良くするためにワラ・モミなどを入れたものであろう。被熱部はガラス状を呈する。	
256	SD2	窯壁	窯壁片					赤橙		
269	SD13	石製品	銅型					赤褐	4条の沈線がみられる。銅型の可能性がある。	
325	SR3	石器	磨製石斧	残存長 16.0	全幅 7.1	全厚 3.8	重量 850g	緑灰	御歯鈍緑色岩製の太形蛤刃石斧の基部。刃部欠損。	
515	包含層	石製品	石鍋	(1.1)	1			内) 灰 外) 灰	鐔の幅は1.5cm。身の厚さは1.3cm。	
516	包含層	石製品	石鍋	(3.1)				内) 灰 外) 灰	石鍋側部。外面に多角形状の整形痕がみられる。身の厚さ8mm。	
517	包含層	石製品	石鍋	(4.5)				内) 灰白 外) 灰	断面紅色。厚さは1.6cm。外面に条線がみられる。	
518	包含層	石製品	石鍋	(8.0)				内) 灰 外) 灰		
519	包含層	石製品	石鍋	(3.3)	17			内) 灰 外) 灰	下側部と底部に6～7mmの孔が2つみられる。石鍋転用温石。	外底は激しく傷ける。
522	包含層	石製品	硯	全長 4.4	全幅 3.9	全厚 0.9			粘板岩製。幅3.75cm、厚さ8mm、ドテ幅2～2.5mm、ドテ高1～1.5mm。	
523	包含層	石器	石鎌	2.2	1.6	0.3	0.7g		サヌカイト。基部はV字状に抉れる。	
524	包含層	鉄製品	不明	7.0	1.5	1.0				
525	包含層	鉄製品	不明	8.5	1.2	0.3				
526	包含層	鉄製品	不明	10.8	1.2	0.3				
527	包含層	鉄製品	不明	10.4	2.2	1.4				
528	包含層	鉄製品	不明	7.3	8.0					

表7 II区出土遺物観察表(土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器)

国版番号	出土地点 層位	種類	器種 器形	法量(cm)			色 調	特 徴	備考
				口径	器高	底径			
529	SD15	白磁	碗	17.0	(3.7)	-	内) 灰白 5Y7/2 外) 灰白 5Y7/2 断) 灰色 5Y/1	胎土は緻密で黒い細粒を含む。釉は黄又はオリーブ色がかかった灰白色で全体的に薄い。残存部では内外面ともに全体に施釉される。器内は全体に薄いつくり。口縁部は外反させ端部を水平にしている。体部外面には気泡が少し認められる。内面口縁部近くにはクロ口痕かと思われるものがみられる。	V-4型の可能性が高い。
530	SD15	土師器	環	-	(1.3)	7.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
531	SD15	土師器	環	-	(1.3)	8.0	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
532	SD17	土師器	環	-	(1.7)	8.0	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
533	SD21	土師器	椀	-	(0.9)	(6.6)	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。断面台形状の貼り付け高台。	
534	包含層	土師器	小皿	7.4	-	5.0	内) 淡橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。底部糸切り。	
535	包含層	土師器	環	13.8	(3.3)	-	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
536	包含層	土師器	環	13.0	(2.9)	-	内) 褐灰 外) にぶい黄橙	精選された胎土。口縁部外方に屈曲。内外面ヨコナデ。	
537	包含層	土師器	環	15.6	(3.0)	-	内) にぶい黄橙 外) にぶい黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
538	包含層	土師器	環	16.2	(3.7)	-	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
539	包含層	土師器	椀	-	(1.1)	6.2	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内盤状高台。底部糸切り。	
540	包含層	土師器	椀	-	(2.6)	6.1	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。俄かにチャートの粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
541	包含層	土師器	環	-	(2.5)	6.2	内) 褐灰 外) 黒	精選された胎土。外面ナデ。内面ヘラミガキ。	外面激しく傷ける。
542	包含層	土師器	環	-	(2.9)	5.6	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	粗い胎土。器表の荒れが激しい。	
543	包含層	土師器	環	-	(1.9)	9.0	内) 灰褐 外) 灰褐	精選された胎土。内外面ヨコナデ。静止糸切り。	内外面擦ける。
544	包含層	土師器	環	-	(1.6)	9.0	内) 灰褐 外) 灰褐	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	内外面擦ける。
545	包含層	土師器	環	-	(1.8)	6.8	内) 浅黄橙 外) 浅黄橙	精選された胎土。内外面ヨコナデ。底部糸切り。	
546	包含層	瓦器	椀	-	(4.2)	-	内) 灰 外) 灰白	細・粗粒砂を含む。口縁部内外面及び体部内面ヨコナデ。体部外面に指頭圧痕がみられる。	
547	包含層	瓦器	椀	15.4	(3.6)	-	内) 灰白 外) 黒	チャートの細・粗粒砂を含む。焼成は炭素吸着不良で瓦器碗の未製品か。内面沈線がみられる。在地産を示す資料。	
548	包含層	須恵器	鉢	21.2	(4.2)	-	内) 灰 外) 灰	細・粗粒砂を含む。内外面ヨコナデ。口縁部擴み出し。	
549	包含層	須恵器	壺	11.4	(7.7)	-	内) 灰 外) 灰	精選された胎土。内外面ヨコナデ。	
550	包含層	青磁	碗	14.2	(3.6)	-	内) 灰オリーブ 5Y5/2 外) 灰オリーブ 5Y5/2 断) 灰白 5Y7/1	胎土は粗く灰白色である。釉は黄色がかかった灰オリーブ色で残存部では内外面全面に施釉されているが、口縁部や文様部分は剥がれており所々しか残っていない。内面に鉄雲文と思われる文様がみられる。粗悪品か。	龍泉堂系青磁 I-4類か。

## 第IV章 考察

### 母代寺土居屋敷遺跡出土の貿易陶磁器

#### I区

当遺跡において出土した貿易陶磁器片はおよそ180点を数え、多くは包含層からの出土である。I区における基本層序から、古代末～中世前期の遺構検出面はⅦ層上面に相当し、遺物包含層はⅣ～Ⅵ層と考えられるが、包含層出土の貿易陶磁器に層位による時期差を看取できなかったため、当稿においては包含層一括資料として扱い、個々の遺物の特徴を概説していくこととする。

※貿易陶磁器の分類は「土佐神社西遺跡・土佐神社」（2006 高知市教委）所収の一覧を参照した。

#### 1. 遺構出土の貿易陶磁器

I区において貿易陶磁器出土の主な遺構としては、SK7・16、SS1があげられ、他はP365から青磁片1点を出土している。

SK7はSS1の下面に位置する遺構で、検出高は33.08mを測る。多量の土師器（底部回転糸切り）・須恵器片などの他に、瓦器碗や瓦片も出土している。板材と多くの礫を検出したことから、水留め遺構の可能性も考えられた。貿易陶磁器は白磁片5点を出土している。図示し得たのは168・169である。168は白磁碗Ⅳ類で、玉縁は三角形に近く、口縁下に1条の沈線による段を有している。169は白磁碗Ⅴ類で、口縁部は外反し、端部を丸く収めている。他の2点もⅣ～Ⅴ類（12世紀代）の細片と考えられるが、下層（2面目）から出土した白磁皿（167）はC類（15世紀～16世紀前半代）と考えられ、時期差を伴う。共伴遺物として瓦質土器の脚付きの羽釜（13世紀後半代）を出土している。

SK16は不整楕円形状を呈した土坑で、検出高は33.10mを測る。多量の土師器（底部回転糸切り）・須恵器片などの他に、瓦器碗や少量の瓦片も出土している。板材と多くの礫を検出したことから、水留め遺構の可能性も考えられた。貿易陶磁器は白磁片3点を出土している。図示し得たのは249・250である。249・250の口縁部は玉縁状を呈し、口縁下に一条の沈線による段を有している。もう1点は底部であり、高台は幅広く豊付内面の削り出しは浅く、器内は厚い。いずれも白磁碗Ⅳ類と考えられる。

SS1はSK7の上面に位置する集石遺構で、検出高は33.27mを測る。多量の土師器（底部回転糸切り）・須恵器片などの他に、瓦器碗や瓦片も出土している。遺構の検出範囲周辺も含めた貿易陶磁器の出土数は12点で、白磁・青磁片ともに6点ずつを数える。図示し得たのは49～52である。49は口縁部が僅かに外反し、端部を丸く収めている。体部内面中位に一条の沈線が認められる。白磁碗Ⅳ類の可能性を残しており、その場合は13世紀後半～14世紀前代と考えられる。50は白磁碗Ⅳ類の底部と考えられ、高台は幅広く豊付内面の削り出しは浅く、器内は厚い。他の白磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ白磁碗Ⅳ～Ⅴ類の細片と考えられる。51は同安窩系青磁碗Ⅰ-1b類で、外面に細

かい櫛描文、内面に櫛描きによるジグザグ文様とヘラによる片彫りが施されており、12世紀後半～13世紀前半代と考えられる。52は類型不明の青磁碗の底部である。見込みと体部境に段を有し、見込みに施文が認められる。他の青磁片はほぼ龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2・Ⅰ-4類の細片であり、12世紀後半～13世紀前半頃と考えられる。周辺から13世紀後半～14世紀前半代と考えられる龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5b類の細片1点を出土している。

Ⅰ区における遺構出土の貿易陶磁器についての概要は以上であるが、中心となる時期は、共存遺物等も含めた年代観として、およそ12世紀～13世紀後半代として捉えることができる。しかしながら遺構出土の貿易陶磁器は、SK7出土の白磁皿（C類）を例外として、いずれも細片であることを考慮しなければならない。

尚、当遺跡において注目すべき遺構の一つにSE1の存在がある。調査区（Ⅰ区）の中央東寄りに位置し、検出高は32.79mを測る。多量の土師器（底部回転系切り）・須恵器片などの他に、瓦器碗や瓦片も出土しているが、遺構の掘形も含めて貿易陶磁器の出土は確認していない。遺物の出土状況などから井戸の廃絶儀礼等が行われた可能性が考えられるが、当遺跡において、廃絶儀礼等に貿易陶磁器が使用されなかった可能性が窺われる資料として注目したい。

## 2. 包含層出土の貿易陶磁器

Ⅰ区における基本層序より、古代末～中世前期の遺構検出面はⅢ層上面と考えられ、Ⅳ～Ⅵ層は遺物包含層に相当する。Ⅳ（Ⅲ）層は灰黄色シルト、Ⅴ（Ⅳ）層は灰茶褐色シルト、Ⅵ（Ⅴ）層は濃茶褐色シルトである。以下、遺物の取り上げ順に出土した貿易陶磁器の概要について述べる。

Ⅲ層出土の貿易陶磁器は16点で、白磁・青磁片ともに8点ずつを数える。図示し得たのは455・461・480・489・493である。455は類型不明の白磁壺の口縁部と考えられる。461は白磁碗Ⅳ類で、玉縁は細長く、外面上位に一条の段を有している。他の白磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ白磁碗Ⅳ類の細片と考えられる。480は類型不明の青磁皿（坏）である。口縁部は外反し、端部は丸く収めている。体部外面に一段の屈曲部がみられ、腰折れの皿（坏）の可能性が考えられる。489は同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類である。口縁部は真っ直ぐに引き上げて、端部は丸く収めている。外面上位に細かい櫛描文がみられる。493は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4類の可能性が考えられる。口縁部は真っ直ぐに立ち上げ、端部は丸く収めている。口縁部内面に2条の沈線がみられる。他の青磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ同安窯系Ⅰ-1b類と龍泉窯系Ⅰ-2・Ⅰ-4類の青磁碗の細片と考えられる。

Ⅲ～Ⅳ層にかけて出土した貿易陶磁器は24点で、白磁片15点、青磁片9点を数える。図示し得たのは456・457・467・470・475・476・491である。456は類型不明の白磁壺と考えられる。残存部位は外湾、中位は中湾、上位は外湾し、口縁部は玉縁状を呈していると考えられる。457はⅣ類またはⅥ-1類と考えられる白磁皿である。体部内面上位で内湾し、屈曲部に段を有しており、12世紀代と考えられる。467は白磁碗Ⅳ類で、口縁部は玉縁状を呈している。470は白磁碗Ⅴ類で、口縁部は外反し、端部は丸く収めている。体部内面下位に沈線を有している。475・476は白磁碗Ⅳ類（12世紀～13世紀初頭頃）で、見込みの軸を輪状に掻き取り、見込みと体部境に段を有している。他の白磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ白磁碗Ⅳ～Ⅴ類の細片と考えられる。491は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-

5b類である。口縁部は真っ直ぐに立ち上げ、端部は丸く収めている。体部外面に鎗蓮弁文を施しており、481と同一個体の可能性を含んでいる。他の青磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4・Ⅰ-5b類の細片と考えられる。

Ⅳ層出土の貿易陶磁器は11点で、白磁片5点、青磁片3点、青花片（染付）2点、他1点（天目茶碗）を数える。図示し得たのは473・503・509・510である。473は白磁碗Ⅴ類で、口縁部は外反し、端部は丸く収めている。体部はやや内湾気味で、体部上位で外反している。他の白磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ白磁碗Ⅴ類の細片と考えられる。503は同安窯系青磁碗Ⅰ-1類の底部で、他は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5b類と類型不明である。509は青花（染付）碗の細片で、15世紀～16世紀代と考えられる。510は青花（染付）皿のE群で、碁笥底である。16世紀後半代と考えられる。

Ⅳ～Ⅴ層にかけて出土した貿易陶磁器は9点で、白磁片6点、青磁片3点を数える。図示し得たのは463・466・469・471・479・487である。463・466・469・471・479は白磁碗Ⅳ類である。463の玉縁は細長く、口縁部に重ね焼き痕が1ヶ所みられる。469は口縁下に1条の沈線による段を有している。471は体部上位に一段の段を有している。479は底部であり、高台は幅広くで畳付内面の削り出しは浅く、器内は厚い。見込みと体部境に沈線状の段を有している。他も白磁碗Ⅳ類と考えられる。487は龍泉窯系青磁碗（Ⅰ-5類）である。口縁部は真っ直ぐに立ち上げ、端部は丸く収めている。体部外面に鎗蓮弁文を施している。他は同安窯系青磁皿Ⅰ-2類と類型不明である。

Ⅴ層出土の貿易陶磁器は9点で、白磁片3点、青磁片6点を数える。図示し得たのは472・481・502・506・508である。472は白磁碗Ⅳ類で、玉縁状の口縁端部は比較的尖っている。他はⅣ～Ⅴ類と考えられる細片と類型不明である。481は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5b類である。口縁部は真っ直ぐに立ち上げ、端部は丸く収めている。体部外面に鎗蓮弁文を施しており、491と同一個体の可能性を含んでいる。502は類型不明の青磁碗の底部である。高台は断面四角形で畳付の先端は断面三角形となり、高台内側の軸の削り出し部分に砂目跡が残っている。506・508は同安窯系青磁皿Ⅰ-2類である。体部外面下位は内側に屈曲し、見込みには櫛描きによるジグザグ文様を施文している。508はヘラによる片彫りが施されており、12世紀後半～13世紀前半頃と考えられる。他は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2・Ⅰ-4類と類型不明である。

Ⅵ層出土の貿易陶磁器は白磁片5点を数える。図示し得たのは464である。464は白磁碗Ⅳ類で、体部外面にロクロ痕がみられる。他の白磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ白磁碗Ⅳ～Ⅴ類の細片と考えられる。

Ⅶ層出土の貿易陶磁器は白磁片2点を数える。白磁碗Ⅴ類と類型不明である。

Ⅶ～Ⅷ層にかけて出土した貿易陶磁器は38点で、白磁片9点、青磁片29点を数える。図示し得たのは458・460・474・477・482・486・490・492・494・495・496・498・499・500・501・505である。458は白磁皿Ⅳ類またはⅥ類と考えられる。体部上位で内湾し、屈曲部に段を有しており、口縁端部は丸く収めている。体部外面上位に2条の沈線がみられる。12世紀～13世紀初頭頃と考えられる。460は白磁皿Ⅳ類と考えられる。口縁部は外反し、体部は内湾している。口縁端部のみ露胎の「口禿げの白磁」であり、13世紀後半～14世紀前半頃と考えられる。474は類型不明の白磁碗の底部である。見込みは化粧土がかけられている可能性があり、また高台は比較的高く、付け高台と思われる。477

は白磁碗Ⅳ類の底部であり、高台は幅広く畳付内面の削り出しは浅く、器肉は厚い。見込みに融着物がみられる。他の白磁片はⅧ類の底部1点と数点の類型不明を含むが、ほぼ白磁碗Ⅳ類の細片と考えられる。501は同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類である。体部は若干内側に屈曲し、内面上位に2条の沈線と櫛描きによるジグザグ文様とヘラによる片影りがみられる。外面上位に細かい櫛描文を施している。495・498は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-1類で、13世紀代と考えられる。495の体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収めている。内外面ともに無文である。498の体部は内湾して口縁部までなだらかに立ち上がり、端部は丸く収めている。底部の器肉は厚く、高台の断面は四角形状を呈している。内外面ともに無文であり、495と同一個体の可能性が考えられる。494・499・505は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類である。494の口縁部は真っ直ぐに引き出し、端部は丸く収めている。体部は内湾気味に立ち上がる。外面は無文で、口縁部内面上位に1条の沈線と、体部内面に蓮華文の片影りを施している。499は底部で、高台は断面四角形で器肉は厚い。見込みと体部境に沈線状の段を有している。体部内面に蓮華文の片影りを施しており、494と同一個体の可能性が考えられる。505は底部で、高台が厚く、体部との境に段を有している。高台内部に一部砂のようなものが付着する。見込みと体部境にも段を有し、体部はなだらかに立ち上がっている。482・486・492は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4類である。482の口縁端部は小さな玉縁状を呈しており、口縁部と体部内面にそれぞれ2条のヘラによる片影りを施している。486の口縁部は真っ直ぐ立ち上がり、口唇部を薄くして、端部は丸く収めている。体部内面に2条の沈線と飛雲文を施している。492の口縁部は内面が僅かに外反し、端部は丸く収めている。口縁部内面に3~4条の沈線がみられ、体部内面に飛雲文を施している。他に同類と考えられる青磁片が1点出土している。490・496・500は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5b類である。490の口縁部は僅かに外反し、端部は薄く引き出ししている。体部外面に鎗蓮弁文を施している。500の口縁部は僅かに外反し、端部は薄く引き出ししている。体部は内湾しながら立ち上がり、体部外面に鎗蓮弁文を施している。同類の青磁片は他に6点を数え、接合部位は異なるが、同一個体の可能性を含んでいる。他の青磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2・Ⅰ-4類の細片と考えられる。

他に層位不明（試掘TRを含む）出土の貿易陶磁器が26点で、白磁片10点、青磁片16点を数える。図示し得たのは459・462・465・468・483・484・485・488・497・504・507である。459は白磁ⅢA群（Ⅲ類）と考えられる。口縁部は外反し、端部は施軸されておらず「口禿げの白磁」である。端部は断面の色とは異なり化粧土を施している可能性が考えられる。462・465・468は白磁碗Ⅳ類である。462の口縁部は細長い玉縁で、465の口縁部には内部断面に空洞がみられ、468の口縁下には段を有している。他の白磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ白磁碗Ⅳ~Ⅴ類の細片と考えられる。497は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-1類と考えられる。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収めている。484は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4類である。内面に口縁部と体部内面にそれぞれ2条のヘラによる片影りを施している。483・485・488は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5b類である。483・485の口縁部は真っ直ぐに立ち上げ、端部は丸く収めている。体部外面に鎗蓮弁文を施している。488の口縁部は外面が直立に引き出され、体部外面に鎗蓮弁文を施している。504は類型不明の青磁碗の底部で、見込みと体部境に沈線状の段を有している。高台は外面を面取りし、畳付部分を斜めに削っている。507は同安窯系青磁ⅢⅠ-1b類である。体部下位が屈曲し、見込みに櫛描きによるジグザグ文様とヘラによる片影

りを施している。他の青磁片も数点の類型不明を含むが、ほぼ龍泉窯系青磁碗 I-4・I-5b類の細片と考えられる。

I区における包含層出土の貿易陶磁器についての概要は以上である。共伴遺物として瓦質土器の煮炊具を例にあげると、Ⅲ～Ⅳ層にかけて出土した遺物のうち、図示し得たのは、鈎付きの羽釜(442)と脚付きの羽釜(443・451)であり、この形態は13世紀中葉から現れてくるとされている。V・Ⅵ層出土の遺物のうち、図示し得たのは鍋(448・449・450)である。この形態は従来「土佐型」と呼ばれていたタイプであり、14世紀中葉～後半にかけて現れてくる。Ⅶ～Ⅷ層出土の遺物のうち、図示し得たのは、鈎付きの羽釜(445・446・447)と脚付きの羽釜(452・453)である。さらに下位の層より鈎付きの羽釜(444)を出土している。

ここで各層ごとの貿易陶磁器と瓦質土器の煮炊具の出土状況から、層位による差異を(主に図示した遺物を対象に)検討してみる。Ⅲ～Ⅳ層から出土した貿易陶磁器の類型は、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類(12世紀代)、Ⅷ類(12世紀～13世紀初頭)と、同安窯系青磁碗 I-1類(12世紀後半～13世紀前半)、龍泉窯系青磁碗 I-4類(12世紀後半～13世紀前葉)、同系青磁碗 I-5b類(13世紀後半～14世紀前半)であり、他に15世紀～16世紀後半の青花(染付)が含まれている。瓦質土器の煮炊具は、13世紀中葉～14世紀前半にかけての鈎付きの羽釜と脚付きの羽釜を中心に出土している。V～Ⅵ層から出土した貿易陶磁器の類型は、白磁碗Ⅴ類(12世紀代)と、同安窯系青磁碗Ⅲ I-2類(12世紀後半～13世紀前半)、龍泉窯系青磁碗 I-5b類(13世紀後半～14世紀前半)である。瓦質土器の煮炊具は、14世紀中葉～15世紀初頭にかけての鍋(「土佐型」)を中心に出土している。Ⅶ～Ⅷ層から出土した貿易陶磁器は、白磁碗Ⅳ類(12世紀代)、Ⅳ～Ⅵ類と考えられる白磁皿(12世紀～13世紀初頭)、Ⅸ類と考えられる「口禿げ」の白磁皿(13世紀後半～14世紀前半)と、同安窯系青磁碗 I-1類(12世紀後半～13世紀前半)、龍泉窯系青磁碗 I-1類(13世紀)、同系青磁碗 I-2・I-4類(12世紀後半～13世紀前葉)、同系青磁碗 I-5b類(13世紀後半～14世紀前半)である。瓦質土器の煮炊具は、13世紀中葉～14世紀前半にかけての鈎付きの羽釜と脚付きの羽釜を中心に出土している。

以上のことから、包含層出土の貿易陶磁器と瓦質土器の煮炊具を含めた年代観として、およそ12世紀～14世中葉頃として捉えることができるが、層位による時期差は看取できず、どの層位においても、12世紀～14世紀代の遺物が出土している。

## II区

II区における貿易陶磁器の出土は、ほぼI区と同様の様相をみせるが、細片を含めて16点を確認しているのみである。

### 1. 遺構出土の貿易陶磁器

II区において貿易陶磁器出土の遺構としては、SD15・18があげられるが、SD15は近代以降の暗渠と考えられる為、検討の対象から除外する。

SD18はほぼ直線状に検出している溝状遺構で、検出高は32.60mを測る。遺物は土師器片3点と白磁片(Ⅳ類)1点を出土している。

## 2. 包含層出土の貿易陶磁器

Ⅱ区における基本層序より、古代末～中世前期の遺構検出面はⅤ層上面と考えられ、Ⅲ～Ⅳ層は遺物包含層に相当する。Ⅲ層は黄茶褐色シルト質土、Ⅳ層は灰色シルト～砂質土である。以下、遺物の取り上げ順に出土した貿易陶磁器の概要について述べる。

Ⅲ層出土の貿易陶磁器は9点で、白磁片1点、青磁片8点を数える。青磁碗は同安窯系Ⅰ-1b類と龍泉窯系Ⅰ-2・Ⅰ-4類を中心に出土し、類型不明の皿も含まれている。白磁碗は類型不明である。Ⅳ層出土の貿易陶磁器は青磁碗Ⅰ-2類が1点出土している。他にⅥ層から白磁碗Ⅳ類が1点出土している。表採・層位不明遺物は4点を数え、何れも青磁碗で、龍泉窯系Ⅰ-2類が1点出土している他は類型不明である。

Ⅰ区同様、層位による時期差は看取できなかったが、およそ12世紀後半～13世紀前葉頃の貿易陶磁器を出土しており、比較的纏まりをみせている。

## 母代寺土居屋敷遺跡出土の貿易陶磁器

当遺跡において、遺構出土の貿易陶磁器の年代観は12世紀～13世紀後半代を中心として捉えられることは前述した。当遺跡が機能していた年代は地域の歴史の中でどのような時期に相当し、どのような位置付けが可能であるのか検討してみたい。

12世紀～13世紀後半は、古代末期から中世初頭（鎌倉時代）にあたる時期である。この頃の当該地域について『野市町史』によれば、『香宗我部家伝証文』（東京国立博物館所蔵）所収の文書より、建久四年（1193）六月九日、中原秋家が香宗我部・深瀨両郷の地頭に補任されているとある。香宗我部・深瀨郷は物部川下流の東岸に位置する現在の香南市野市町・赤岡町および吉川町古川を中心とする地域であり、地名を氏として中原秋家・秋通が後に香宗我部氏を名乗るようになったという。

『倭名類聚鈔』（承平年間931～938）に土佐七郡の郷名が記され、当該地域は深瀨郷に所在していたと考えられる。野市町の物部川東岸には大字深瀨が現存し、弥生時代後期～古代にかけての深瀨遺跡、その北方約500mに古代末～中世前期にかけての深瀨北遺跡が確認されている。他に南北朝時代と考えられる深瀨城跡が所在していたとされるが、城跡を示す遺構は確認できていない。当遺跡の北には亀山窯跡（古代）、さらに物部川西岸には岩村遺跡群（弥生～中世）が展開している。

香南市（野市・香我美町）および周辺の遺跡のなかで、貿易陶磁器の出土を確認している遺跡は、深瀨北・曾我遺跡（野市町）、拝原・十万・稗地・徳王子広本・クノ丸遺跡（香我美町）、岩村遺跡群（南国市）、高柳遺跡（香美市土佐山田町）、やや離れて美良布遺跡（同香北町）などがある。

深瀨北遺跡は当遺跡の南東、物部川の河口から約5km上流に遡った東岸の新期扇状地上に位置し、調査区近辺の標高は約22m前後を測る。貿易陶磁器は同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類が主体で出土している。川に面した立地から「郡津」の性格も想定され、中央官衙との交易の場として機能していたと考えられる。

曾我遺跡は野市町中ノ村に所在し、台地状を呈する古期扇状地上を流れる香宗川の西岸、同支流の山北川の東岸に位置しており、標高約7mを測る自然堤防上に立地している。宗我郷の「郷家」

母代寺土居屋敷遺跡出土の貿易陶磁器と周辺遺跡の消長表

母代寺土居屋敷遺跡 出土貿易陶磁器	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀
遺物 (破片点数)						
白磁碗						
IV類 (34点)		██████████				
V類 (14点)		██████████				
VIII類 (3点)	...	██████████	...			
IX類 (1点)			██████████	██████████		
類型不明 (18点)						
白磁皿						
IV類 (3点)	...	██████████	...			
IX類 (2点)			██████████	██████████		
E2-b類 (1点)					...	██████████
類型不明 (3点)						
青磁碗						
—同安窯系—						
I-1b類 (10点)			██████████			
—龍泉窯系—						
I-1類 (3点)			...	██████████	...	
I-2類 (13点)			██████████			
I-4類 (13点)			██████████			
I-5b類 (22点)				██████████		
類型不明 (23点)						
青磁皿						
—同安窯系—						
I-1類 (1点)		...	██████████	...		
I-2類 (3点)		...	██████████	...		
類型不明 (5点)						
青花(染付)碗						
類型不明 (1点)						
青花(染付)皿						
C類 (1点)					...	██████████
遺跡						
母代寺土居屋敷遺跡 (香南市野市町)	...	██████████	██████████	██████████	██████████	██████████
深淵北遺跡 (香南市野市町)	██████████	██████████				
曾我遺跡 (香南市野市町)	██████████					
押原遺跡 (香南市香我美町)		██████████	██████████			
十万遺跡 (香南市香我美町)				██████████	██████████	██████████
岩村遺跡群 (南国市)					██████████	
高柳遺跡 (香美市土佐山田町)		██████████	██████████			██████████
美良布遺跡 (香美市香北町)		██████████	██████████	██████████	██████████	

※ 遺跡の消長は各報告書に基づき、古代末～中世を中心に大凡の時期幅で示している。

あるいは郡衙クラスの役所の存在が推定されている。貿易陶磁器は白磁碗Ⅱ類が土坑から出土している。

坪原遺跡は香我美町上分坪原に所在し、香宗川支流の山南川右岸の標高約19m前後を測る河岸段丘上に立地している。古代においては大忍郷（『倭名類聚』）に属し、鎌倉時代に入ると大忍庄と呼ばれ、北条得宗家の支配下に置かれる。貿易陶磁器は龍泉窯系青磁碗Ⅰ・5類や同安窯系青磁碗Ⅰ類、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ類など60数点を出土している。

十万遺跡は香我美町十万に所在し、香宗川左岸の標高約13m前後を測る河岸段丘上に立地している。「重濠複郭式屋敷城」（松本豊寿『城下町の歴史地理的研究』1967年）と考えられる溝跡の検出など、大忍庄内において名主層などの在地勢力が、構造的変質を遂げる時期の遺構として注目されている。貿易陶磁器は龍泉窯系青磁碗Ⅰ・4・Ⅰ・5類、白磁碗Ⅳ類などが14世紀後半～15世紀代の遺構から出土している。

碑地遺跡は香我美町上分碑地に所在し、山南川左岸の氾濫原性の低地から低位段丘に続く標高約22m前後を測る平坦面上に立地している。中世における本遺跡の位置付けは不明であるが、ピットから龍泉窯系青磁碗Ⅰ・2類を出土している。

徳王子広本遺跡は香我美町徳王子広本に所在し、岸本川左岸の低湿地をⅠ区、その東に広がる丘陵地をⅡ区として2007年度に調査を実施した（『高知県埋蔵文化財センター年報第17号』2008年）。貿易陶磁器の多くは包含層からの出土であるが、Ⅱ区の残丘緩斜面上に古代～中世の建物跡を数棟検出し、井戸跡の掘形から青磁片を出土している。

クノ丸遺跡は香我美町岸本に所在し、浜堤に立地する中世を中心とした遺跡で、月見山西麓から西に延びる浜堤の東端に位置し、南には太平洋、北には岸本川左岸の低地が広がる。中世の土師質土器や瓦質土器を中心に、青磁や白磁といった貿易陶磁器の出土もみられる（『高知県埋蔵文化財センター年報第18号』2009年）。

岩村遺跡群は南国市福船に所在し、物部川の河口から約5km上流に遡った西岸の新时期状地上に立地し、調査区近辺の標高は約20m前後を測る。岩村土居城跡を中心に、近世から弥生時代前期にかけての複合遺跡であり、貿易陶磁器は岩村土居城跡から約100点を出土している。青磁片は全て龍泉窯系で、14世紀後半から15世紀代と考えられる。岩村土居城跡は物部川の旧河道の自然堤防上に占地していたと考えられ、「川津」としての役割も果たしていた可能性が指摘されている。

高柳遺跡は香美市土佐山田町に所在し、物部川西岸の標高約29m前後を測る扇状地上に立地している。高柳土居城跡関連を中心とした遺構を検出しており、貿易陶磁器は龍泉窯系青磁碗Ⅰ・4・Ⅰ・5類他数点をTR調査で出土している。土坑から12世紀～13世紀頃の遺物を一括して出土しているが、周辺ピットからは15世紀後半～16世紀前半の遺物が出土し、時期差を伴う。高柳土居城跡も物部川の河川流通の要地に占地していたと考えられ、成立の背景には、土佐守護細川氏や地域権力として成長した山田氏の支配に関与した在地土豪の存在が指摘されている。

美良布遺跡は香美市香北町美良布に所在し、物部川によって形成された河岸段丘上の開けたところに立地している。鎌倉時代には大忍庄菰生郷に属し、後に香宗我部氏と祖を同じくする山田氏の支配領域となる（『香北町史』）。貿易陶磁器は青磁・白磁等を出土している。青磁は同安窯系青磁皿

I-1b類や龍泉窯系青磁碗 I-4b類が古く13世紀前半に位置付けられるが、最も出土例の多いのは雷文帯を有するものと、鎚蓮弁文を有するものであり、14世紀から15世紀前葉に位置付けられる。次いで細蓮弁文や無文の青磁碗があり、15世紀代に属する。白磁碗はⅣ・Ⅴ類（12世紀）、Ⅷ類（14世紀）に属するものがみられる。

以上、母代寺土居屋敷遺跡周辺の主な貿易陶磁器出土遺跡を概観してみた。いずれの遺跡も、物部川や香宗川またはその支流や小規模河川沿いの自然堤防や河岸段丘上に所在し、水運に適した地形に立地している傾向にあると考えられる。物部川は下流域と上流域を結ぶ流通の要路として存在し、物部川を中心とした地域経済圏を形成していたと考えられる。これらの遺跡から、遠隔地間水運（貿易・交易）に関わる湊津が近在し、物流の集散地または消費地の存在を示していると考えられる。それらは当時の地域権力や情勢と深く関わっていたと考えられ、12世紀前半頃にピークを迎える。遺跡の性格としては、地方官衙関連遺跡や豪族の拠点、それらと関連する津などの流通拠点と考えられるが、貿易陶磁器の出土量は他地域に比べ僅少である。12世紀末から13世紀初頭にかけて画期がみられ、流通ルートや拠点的遺跡の立地に関しては古代以来の伝統的な枠組みを継承しているが、流通量や分布状況に変化があり、物部川下流域での動きは乏しくなる。当遺跡はそのような情勢の中、生活空間としての機能を終える。その後13世紀前半から14世紀初頭頃に田村遺跡群への集中がはじまり、14世紀初頭から15世紀前半頃の画期を迎えると、広域品は減少傾向にある。南北朝期には鎌倉期に栄えた中心集落の衰退がみえ始めるが、山城を含む城館や一部の拠点的遺構に集中する動きがみられる。

当遺跡の歴史の中で果たした役割については不明な部分が多く、貿易陶磁器の出土状況から遺跡の概要は測りかね、再検討を要するものと考えられる。

#### 【参考・引用文献】

- 浜田恵子『土佐神社西遺跡・土佐神社』高知市教育委員会 2006  
 吉成承三『深湖北遺跡』野市町教育委員会 1996  
 高橋啓明・吉原達生『曾我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989  
 出原恵三『拝原遺跡』香我美町教育委員会 1993  
 出原恵三『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会 1988  
 松田知彦『禪地遺跡』高知県埋蔵文化財センター 1993  
 三谷民雄『岩村遺跡群Ⅲ』南国市教育委員会 1998  
 山本哲也『高柳遺跡・高柳土居城跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会 1992  
 出原恵三『美良布遺跡調査概報』香北町教育委員会 1991  
 吉成承三『四国の土製煮炊具 ―古代末から中世にかけての土製煮炊具の様相―』  
 『土製煮炊具の諸様相』第25回 中世土器研究会2006  
 池沢俊幸『土佐における広域分布品の様相』『中世西日本の流通と交通』2004  
 松田直則『土佐における中世遺跡出土の貿易陶磁器』  
 『海運・流通から見た土佐一条氏の学際的研究』2008

高知県埋蔵文化財センター年報 第17号 2008

高知県埋蔵文化財センター年報 第18号 2009

『野市町史 上巻』野市町史編纂委員会 1992

『香北町史』香北町史編さん委員会 2006

## 第V章 まとめ

### 母代寺土居屋敷遺跡の性格

#### 1. 時期はいつ頃

母代寺土居屋敷遺跡の遺構から出土した遺物は12世紀後半が中心で、包含層出土資料をみれば、この周辺に12世紀から15～16世紀にかけて集落が形成されていたことがわかる。弥生土器や近世の遺物も確認はされているものの、包含層中や自然流路から検出されたものであり、量的にも僅少である。今回の調査地点は12世紀後半が中心だが、12世紀前半や13世紀後半の遺構も検出されており、包含層出土資料にも瓦質土器や龍泉窯青磁Ⅰ・b類など13世紀代にも遺跡が継続していたことを示す遺物が散見される。

母代寺土居屋敷遺跡は、遺跡名となっている「母代寺」とも「土居屋敷」とも異なる来歴を持つ遺跡である。「母代寺」地名は、紀夏井に由来する地名である。紀夏井は、貞観8年(866年)応天門の変の際、首謀者の一人紀豊城と血縁関係(異母弟)があるという理由で連座、肥後守の任を解かれて土佐に流された。土佐に配流されるまでは、播磨介、讃岐守、肥後守などを歴任、それぞれの任地で領民に慕われた多くの逸話が残る。夏井はまた孝心も篤かったようで、両親の死後、母代寺・父養寺とそれぞれ草堂を建て弔ったと伝えられている。その地名が残り、「母代寺村」「父養寺村」が中世から近世にかけての村名として資料に登場する<sup>1)</sup>

亀山の山頂付近は紀夏井旧邸として県の史跡に指定されている。指定された根拠は周辺から多くの古瓦が出土することのみであり、実際に夏井邸がどこに営まれたのか、はっきりしているわけではない。母代寺・父養寺の所在地についても諸説有り、現在も確定はしていない。紀夏井が土佐へ来たのは9世紀後半のことであり、母代寺土居屋敷遺跡とは直接関連する訳ではない。

また、遺跡名の由来である「土居屋敷」という小字名だが、土居屋敷地名は当遺跡のある東深淵郷に限っても3箇所残っている。土佐においては、「土居」には大きく分けて2種類の意味がある。中世以来の防御施設(濠)を持つ豪族屋敷を示す土居(旧土居)と新たに長宗我部時代以降に家臣団に組み込まれた有力給人層の居館としての土居屋敷(新土居)の2種類であり、旧土居は中世以降の豪族屋敷であり、土居屋敷と呼ばれるのは新土居のことを示している<sup>2)</sup>

天正16年(1588年)の検地の段階で、母代寺村の地名に「土居屋敷」はなく、それに相当するヤシキの存在も確認できない<sup>3)</sup>。天正年間以前の土居の痕跡も認められない。検地段階以前の旧土居は、少なくとも(検地時点で現存しなくとも)地形あるいは地名に明らかな痕跡が確認できるはずである。遺跡が地検帳記載の母代寺村の範囲にあることは間違いない。今回の調査範囲からは、中世末から近世にかけての遺物は少量確認されているものの、当該期の屋敷に伴う遺構はない。小字「土居屋敷」の範囲は調査地点から南へ広がっていることから、新土居と推定される屋敷が調査地点より南に営まれていた可能性はある。地検帳の記載を手がかりにすれば、天正16年よりも新しい時期

に土居屋敷が成立、地名として残されたものと推定される。

## 2. 遺構

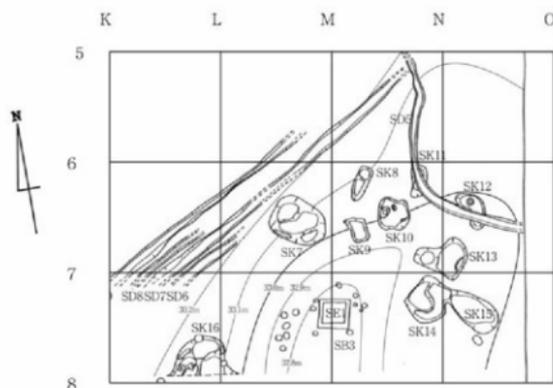
### ①井戸

遺跡内には土坑や獨立柱建物、溝とともに遺物が集中する井戸があり、ビット群のまつまりから屋敷地を構成していたことがわかる。井戸以外にも遺物の集中する遺構が2ヶ所（SK7とSK16）有り、そのうちSK7は調査時点では井戸（SE2）として、調査を進められていた。遺構内から板状の木製品が検出された点と多量の礫が投棄されている様子が、この2つの遺

構には共通している。さらに遺構形状も遺構内に段構造をもち深掘りされている点が似通っており、検出面標高、遺構検出面からの段部（30cmほど）や深掘り部分の深さ（55cm前後）もほぼ同じ点などから、同じ性格の遺構だと考えた方が良さそうである。SE1は30cmほど低い地点に立地、その北側と西側の一段高まった場所にこれら2つの遺構が形成されている。

井戸（SE1）との位置関係から、これら2つの遺構が「水」に関する遺構である可能性が想起され、「水溜め」用など、ある種の井戸としての機能を持っていたのではないかと考えられる。同時期の類似例として、香宗川流域の曾我遺跡SK5の例がある。<sup>(4)</sup> この遺構は、母代寺土居屋敷遺跡SE1と同時期だと考えられる高柳遺跡SK1に先行する時期（12世紀後半）<sup>(5)</sup>で、SK7とSK16とを比較すると、段部を持ち、板状木製品が出土する点など共通点もある。曾我遺跡SK5については、報告書で井戸の可能性が指摘されている。

高知県内の発掘調査で確認された井戸は今まで40基知られている。（現在整理作業中の土佐市上ノ村など未報告資料をのぞく）井戸とは、河川や池沼など水を溜めて汲み上げることのできることも含めた広義の「井」の一部で人工的に掘削されたものだという。南国市田村遺跡群の弥生時代前期の溝に接して深く掘られた土坑の例が、井戸の可能性を持つ県内最古の例である。<sup>(6)</sup> これらの弥生時代に遡る例は「井戸」と認識されていないケースも多く、今回は古代以降の井戸と認識されたケースについてのみに集めてみた。高知県以外の例では、都市に伴う井戸の発掘調査例が多く報告されている。平安京・平城京・太宰府・草戸千軒など、都市生活において井戸は重要な役割を担って



SE1、SK7、SK16遺構配置と地形（10cm等高線）

## 高知県で発掘調査された井戸（古代以降）

遺跡名	遺構名	市町村	時期	時期詳細	形態	掘形平面形	掘形平面 (m)	井戸 平面形	規模 (平面・m)	深さ (m)	発掘 状況	井筒	特徴	
1	ひびのきサワジ遺跡	SE1	土佐山田町(香美市)	古代	10世紀後半	素掘り	円形		円形	1.50×1.75	3.45	土器部として利用	なし	床面厚68cm
2	曾我遺跡	SK5	野志町(香美市)	古代	12世紀	素掘り(板石)	楕円形					なし	板材出土	
3	土佐国衙跡	SE01	南国市	中世	13世紀	石組 推定	円形	4.50	円形	1.10	2.66	残存せず	埋土中に人頭火の礎。断面は段階的。	
4	坪ノ内遺跡	D(KE)1	中土佐町	中世	13世紀後半~14世紀	木組	不整楕円形	3.80×3.05	方形	1.20×1.20	2.73	なし	木組方形板敷板調柱礎残存あり	
5	具同中山遺跡群	SE1	中村市(四万十市)	中世	13世紀中葉~14世紀初頭	木組	不整方形	1.50×1.14	方形	1.00×0.90	1.50	なし	埋土中に人頭火の礎。断面は段階的。	
6	神田ムク入道遺跡	SE1	高知市	中世	14世紀	石組			円形	1.20×1.20	1.10	なし	曲物	
7	田村遺跡群 II	CASE401	南国市	中世	15~16世紀	石組	円形	1.98×1.80	円形	1.50×1.44	3.20	なし	○輪盤(石組の下)	
8	田村遺跡群 L13	SE1	南国市	中世	15~16世紀	石組	不整長円形	5.50	円形	1.20	3.95	なし	直径45cmの切り貫き材	
9	田村遺跡群 L22	SE1	南国市	中世	15~16世紀	石組	楕円形	2.33	不明	不明	2.50	検出せず	石はぬきとられている。	
10	田村遺跡群 L33	SE1	南国市	中世	15~16世紀	石組	不整長円形	3.80	円形	0.90	4.32	なし	調査中石組陥落	
11	田村遺跡群 L30C	SE2	南国市	中世	15~16世紀前半	石組	不整楕円形	3.35		1.60	3.50	なし	底に径40cmのどぶちあり。平面のみ	
12	田村遺跡群 L18	SE1	南国市	中世	15世紀	石組	円形	3.80	円形	1.20	3.80	なし	直径60cmの切り貫き材	
13	田村遺跡群 L25	SE1	南国市	中世	15世紀	石組	記載なし	記載なし	方形に近い	0.80	2.5m以上	なし	屋敷入の青灰土-前巻の白灰土(厚10cm)・坂面下30cm埋込まる	
14	田村遺跡群 L25	SE2	南国市	中世	15世紀	石組	楕円形	4.80	記載なし	記載なし	3.30	なし	直径50cmの切り貫き材	
15	田村遺跡群 L31A	SE1	南国市	中世	15世紀	石組	円形	3.50		1.50	4.20	なし	上部直径110cmの切り貫き材・下部直径60cmの楕(板石)	
16	田村遺跡群 L4	SE1	南国市	中世	15世紀	石組	楕円形	2.88	円形	1.24	3.48	なし	直径60cmの切り貫き材	
17	田村遺跡群 L16	SE1	南国市	中世	15世紀後半	石組	円形	2.84	円形	0.72	4.08	桶状	最下部に直径40~50cmの楕円形	
18	田村遺跡群 L42	SE1	南国市	中世	15世紀後半~16世紀前半	石組	不整円形	3.50	円形	1.30	3.20	桶状	底に50~50cmの楕円形。西1m、南2mに各×楕円	
19	田村遺跡群 L20	SE1	南国市	中世	16世紀	石組	円形	3.20	円形	1.20	3.20	なし	直径68cmの切り貫き材	
20	田村遺跡群 L21	SE1	南国市	中世	16世紀	石組	不整円形	3.40		1.60	3.88	なし	直径68cmの切り貫き材	
21	田村遺跡群 L21	SE2	南国市	中世	16世紀	石組	不整円形	3.30	不明	不明	1.8m以上	不明	継落のため	
22	田村遺跡群 L21	SE3	南国市	中世	16世紀	石組	不整円形	3.00		1.52	3.80	なし	直径53cmの切り貫き材	
23	田村遺跡群 L39B	SE1	南国市	中世	16世紀後半	石組		3.92		1.32	3.80	直径不明切り貫き材		
24	田村遺跡群 L10	SE1	南国市	中世	不明	石組	円形	2.88	円形	1.20	3.20	確認せず	一度破壊	
25	土佐国衙跡	SE02	南国市	中世	室町時代	石組	円形	3.50	円形	1.50	3.80	確認せず	埋土30cm前後の円筒集中	
26	土佐国衙跡	SE03	南国市	中世	室町時代	不明	円形	3.50	円形	不明	0.9m以上	一部のみ調査のため不明	埋土1層に20cm前後の円筒集中。一部の不明	
27	坪ノ内遺跡	D(KE)2	中土佐町	中世		石組	円形	3.08×2.92		不明	不明	不明		
28	坪ノ内遺跡	D(KE)3	中土佐町	中世		素掘り	不整楕円形	3.00×2.84			0.75			
29	坪ノ内遺跡	CKSE1	中土佐町	中世		素掘り	楕円形	3.40×3.16			0.84	なし	中土器出土	
30	天神遺跡	SE201	土佐市	中世		木組	方形		方形	1.60×1.45	1.48	なし	直径70cm、木を割抜いた井筒	
31	林口遺跡	SE1	土佐市	中世		石組	円形	4.10×4.10	円形	2.10×2.10	3.96	なし	○輪盤(石組の下)	
32	林口遺跡	SE2	土佐市	中世		石組		2.67×3.07	円形	0.55×0.55	3.28	なし	○輪盤(石組の上)の石組	
33	田村遺跡群 L38C	SE1	南国市	中近世	15~17世紀初頭	石組		4.68		1.00	4.30	直径60cmの切り貫き材	慶長16年(1607年)鎌は小・前3枚の木葉・平面のみ	
34	田村遺跡群 L38A	SE1	南国市	中近世	16~17世紀初頭	石組	不整円形	4.40		1.20	3.80	直径60cmの切り貫き材	平截不可能・平面のみ調査	
35	土佐郡岐遺跡	SE1	佐川町	近世	18世紀	石組		東西2.45×南北2.61	円形	上端0.75~0.80底面1.02	1.72	なし		
36	菅原町地下貯輪跡	未報告	高知市	近世	幕末の料亭	木組							遺構内2ヶ所に著目土	
37	高知城伝下層敷跡 井戸1	高知市	近世		○輪	円形	2.45×2.45	円形	0.81×0.83	1.90	なし			
38	高知城伝下層敷跡 SE2	高知市	近世		○輪	円形	1.35×1.45	円形	0.80	4m以上	なし	○輪	下部に玉石・玉砂利	
39	高知城伝下層敷跡 SE3	高知市	近世		○輪	円形	1.15×2.01	円形	0.85	0.90	なし	○輪	下部に玉石・玉砂利	
40	高知城伝下層敷跡 SE1	高知市	近代	明治以降	打込	不整方形		不整方形	1.00×0.90	4.80	なし	瓦竹筒状	鉄金・丸釘存在	

いた。

高知県の調査例の中で、木組みの井戸枠を持つものは4例と少なく、SE1と同じ井戸枠の型式（組み立て式方形縦板組型のB1類-薄板横棧留型・隅柱あり）に分類されるのは其同中山遺跡で確認された13世紀～14世紀の例、1例のみである。<sup>7)</sup> SE1は廃絶儀礼がはっきりと確認できる点に特徴があるが、廃絶儀礼に使用された遺物は土師器杯・椀と小皿、須恵器甕、布目瓦である。県内には同時期の例がほとんどないため、単純な比較検討はできないが、井戸の廃絶儀礼としてこれだけの遺物を敷き詰めるように並べる事例はない。香美市土佐山田町ひびのキサウジ遺跡の例のみ大量の遺物投棄が認められ、出土遺物は高知平野の編年上10世紀後半の基準資料となっている。ただし、報告者によって「井戸としての機能を果たさなくなり、その後は廃棄し土器溜まりとして利用された」と報告されるように、祭祀的な意味合いは持たないようである。<sup>8)</sup>

鐘方正樹氏は『井戸の考古学』第6章井戸の祭祀において、井戸の祭祀の段階として構築時・使用時・埋め戻し時の3段階を設定している。構築時と埋め戻し時の祭祀は中国思想との関連が大きく、使用時の祭祀は日本古来の思想に由来しているという。祭祀行為のまったく確認できない井戸も多いという。しかし、本書に集成され、紹介されているいずれの例を見ても、SE1と同形態あるいは類似した祭祀の形を見出すことはできない。母代寺土居屋敷遺跡SE1の場合は、「廃棄土坑」や「土器溜まり」としての可能性はなく、「祭祀」としての意味合いを持った意図的な行為であり、井戸廃絶に伴う「廃絶儀礼」である。整然と並べられた布目瓦や須恵器甕、その間に配された土師器の杯・椀・小皿の在り方もそれを示しており、その中には底部に穿孔された土師器杯もある。並べられた瓦には2次的に被熱し、赤変したものも多い。

遺物からは、SK16→SK7→SE1の変遷が想定される。12世紀後半から12世紀末にかけての短い時間幅の中での廃絶時期の差だと考えられる。これらの遺構の機能していた時期は重なり合っている。SE1は何らかの上屋構造を持っていた可能性がある。遺構周辺に10基以上のピットが確認されており、いくつかのバタンの上屋を持つ建物が復元可能である。これに対して、SK7とSK16は周辺に建物を構成可能なピットがない。

## ②土取り跡～粘土採掘坑

調査時点において更谷氏は下層から検出された土坑の性格を、周辺で営まれた室で消費する粘土の採掘坑であると捉え、「土取り跡」として調査を進めた。本報告においてもそれを踏襲し、これらの土坑を土取り跡1～4として報告する。残念ながら、これらの遺構から出土する遺物はほとんどない。唯一出土した須恵器鉢は胎土の特徴から、亀山窯の製品である可能性を指摘することができる。亀山窯の存続時期は、8世紀から12世紀にかけてとされており、これらの土坑が「粘土採掘坑」である可能性は高い。掘立柱建物や井戸など主な遺構検出面はⅥ層（調査時点でⅤ-1層とされた）上面であり、土取り跡遺構が検出されたのは、その下層、Ⅺ層上面である。埋土はⅩ層とした腐植土と周辺の粘土がブロック状に混在する土であり、Ⅺ層の黄褐色粘土層を掘り粘土採掘の直後に埋め戻したものだと考えられる。

このⅩ層より上面のⅪ層から出土した須恵器椀（400）は、その形態から12世紀中葉に位置づける

こののできる資料であり、4基の「土取り跡」は、少なくとも12世紀中葉以前の遺構だと見える。この時期は、亀山窯の機能していた時期と重なる。

平成12年度の本発掘調査時に調査地点を訪れた武吉宏和氏（陶芸家・四万十町松葉川温泉近くの龍窯にて作陶）は、遺跡周辺にあるこの粘土を採取、実際に作陶を行った。使える粘土だという予想に反して、腰がない粘土で手びねりができないなど、グニャグニャの印象で耐火度は低かったようである。その反面、高温でなくても（1000℃ほど）水が漏れなくなるなど、「屋根瓦に向く土」という評価もあったらしい。土器製作のためにはタタキ締めてから使う必要があったようで、南国市大篠小学校では子どもたちと一緒にタタキ締めて円盤状にした粘土から土器の形を造り出したと語る。物部川以西の香長平野や香美市土佐山田町周辺で得られる良質なものと異なる粘土であり、この粘土を使って須恵器の製作を行った集団の技術の高さに感心したと述べられている。

遺跡調査の際に、瓦業者による粘土採掘坑に遭遇することがある。香南市赤岡町大東遺跡の場合は近代の粘土採掘自体を発掘対象とし、明治期の瓦粘土採掘の様相を明らかにしようとした<sup>9)</sup>。また、弥生時代には香南市香我美町下分遠崎遺跡のように土器製作用粘土の貯蔵土坑の確認例<sup>10)</sup>などいくつかの土器製作に関する「粘土」の調査例があるものの、粘土採掘坑と推定される遺構の例はほとんどない。当遺跡の例は12世紀中葉以前（古代・平安時代後半）の粘土採掘の例として注目される事例だといえる。

### ③ その他の遺構

時期が確認可能な遺構の例として以下の例が挙げられる。

12世紀中葉以前の遺構	SK12 土取り跡4
12世紀中葉～後半	SK2・3
12世紀後半～末	SE1・SK7・SK16
13世紀後半～14世紀	P9・P379

## 3. 出土遺物

白磁・青磁・染付など11世紀後半から15世紀までのまとまった量の貿易陶磁器が確認されている。ピークは12世紀代で、物部川流域の諸遺跡との比較により、当遺跡の特徴が浮かび上がっている（第四章考察）。

SE1・SK7・SK16など12世紀後半段階の遺構一括資料が得られた。SE1は高柳遺跡SK1と同じ時期であり、SK16・SK7はそれに先行する時期の資料だと考えられる。これらの遺構からは土師器供膳具として小皿・碗・坏が出土し、SK7とSK16が碗形態中心であるのに対し、SE1には一定量の坏が含まれていること、底部形状の比較で、輪高台・柱状高台・平高台の比率がSK7とSK16の方が高いこと、より新しい時期ほど小皿の法量が小型化する傾向がある点<sup>11)</sup>などからSE1に対してSK7とSK16の方がより古い要素を持っている。

須恵器と布目瓦には、播磨の影響が色濃くみられる。直接、搬入された資料としての東播系のこね鉢や甕などもあるが、同時にその影響下に在地で生産された亀山窯の製品を確認することができ

る。須恵器の形態は、播磨の模倣だと考えられ、瓦も包み込み技法が確認されるなど、播磨の影響下にある<sup>129</sup>。亀山窯で生産された瓦は平安京大極殿・法勝寺の瓦に使用されていたことがわかっている<sup>130</sup>が、亀山窯産の須恵器の甍は広域流通せず、現地周辺のみで使用されたのではないかと、いわれている。県内の遺跡からの出土例もほとんどない<sup>131</sup>。表面が海綿状になった窯壁も何点か出土しており、これらの存在も亀山窯との関連を示唆する。

布目瓦も重要な知見をもたらす。従来知られている亀山窯出土古瓦は、奈良時代末～平安時代初期の資料と平安時代後期の資料にわかれる。今回の調査では、平安時代後期の瓦が出土している。SK7からは、宝相花（華）文軒平瓦が、SE1からは平安時代後期に流行した剣頭文を持つ軒平瓦が、そしてSE1に近接する包含層中から左巻三巴文の軒丸瓦が出土している。この軒丸瓦は21個の珠文帯を持ち、尾は長く圏線に接するまで延びている。巴文の起源については諸説があるが、瓦頭文様としての巴文は、平安時代後期に中央官衛系瓦屋において出現、12世紀中葉（Ⅳ期）から後半～13世紀初頭（Ⅴ期）にかけて盛行、それが地方に波及するとされる。また、SK7の上面のSS1（集石遺構・SK7上面）からは連巴文軒平瓦が出土しており、先述のとおり、播磨の影響を強く感じる。生産のウェイトは地元より京都、すなわち「瓦生産の主目的は中央への納入」にあった。今里幾次氏は「播磨の窯がすべて瓦陶兼業である」ことから「瓦陶兼業窯の発足と進展とは、院政政権による造寺・造塔の盛行に伴う屋瓦の需給増加に起因し、それに対処するために地方窯を動員—従来の須恵器窯の転用強化によって生産増強を図ったことの現われであった。」と、この時期の瓦需要増加の一因を指摘している<sup>132</sup>。

12世紀代の遺物として特筆すべきは、合計6点出土した滑石製石鍋の存在である。日宗貿易に関連して移動した遺物だと考えられており、産地である長崎と北九州、畿内に分布の中心が限定されている。今回出土した石鍋は、甕が水平に延びる段階であり、木戸編年Ⅲ-a期に相当し、12世紀の時間幅の中で捉え得る資料であり、Ⅲ-a期でも前半にあたる12世紀の中葉以前の資料だと考えられる<sup>133</sup>。破損後穿孔が認められるもの、再加工して石鍋とは異なる面を作り出したものなど、「温石」に転用されたと確認される資料が2点ある。

点数は少ないものの瓦器碗も出土している。瓦器碗の中で1点楠葉型瓦器碗が確認された。楠葉の瓦器碗は幡多においては四万十市具同中山遺跡群、土佐清水市加久見遺跡など確認例が増えつつあるが、高知平野では出土例がほとんどない。確認されたのは11世紀後半（Ⅰ期）の資料が出土した南国市栄エ田遺跡に次いで2例目のことである<sup>134</sup>。12世紀第3四半期の資料であり、当該期の瓦器碗の出土は注目される。

また、須恵器碗の中に内面に板ナデ（コテアテ）が残る平高台碗がある。従来は、仁淀川流域以西にのみ確認された個体であり、内面に板ナデ（コテアテ）が残る。ただ、当遺跡調査後10年近くの間調査事例も増加しているが、その後1例も類例を確認できていないという<sup>135</sup>。高知平野で内面に板ナデのある平高台碗が仁淀川流域に限定されない可能性を示す資料ではあるが、例外的な資料だと捉えた方がよいかもしい。

#### 4. まとめ～遺跡の性格について～

母代寺土居屋敷遺跡の今回の調査地点の性格について、調査担当者である更谷大介氏は調査時点において、「亀山窯」との関連を意識し、この遺跡が亀山窯の工人関連の集落(屋敷)である可能性が強いと考えていた。本報告書作成に際して、池澤俊幸氏と吉成承三氏(ともに高知県埋蔵文化財センター)からも同様のご指摘をいただいた。

この遺跡のピークは12世紀にある。それ以降も包含層出土の貿易陶磁器が少量確認されることから、近辺に集落はあっただろうが、その性格は特定できない。しかし古代末の遺構・遺物は多くのことを語りかける。12世紀段階の遺物からわかることは、遺跡で暮らす人々が、高知平野においては特別といってもいいほどの流通ルートを持っていたことだ。遺跡から500mほど西南の深淵北遺跡<sup>(9)</sup>がこの遺跡にとっての玄関口であり、深淵北にあったと考えられる「川津」を通じた交易が行われていた。深淵北遺跡の遺物とも共通する部分が多い。滑石製石鍋、石鍋転用温石、桶葉型瓦器碗、貿易陶磁器、これら日宋貿易とそれに関する流通過程でもたらされた品々、その対価として古代末院政期の寺院建造の需要にこたえるべく、瓦の生産・搬出が行われていた。瓦や須恵器の技術的なバックボーンは「播磨」であり、東播系須恵器に類似した須恵器の甕や鉢を周辺で消費するためだけに生産、中央の要求に応じて瓦の生産を行う。

「瓦」は「寺院」に結びついており、近在寺院の存在が想定されるかもしれない。その可能性も捨てきれない。しかし、ここで生産された瓦は周辺の寺院に使われたものではなく、主に中央の寺院建設の需要に応じて生産されたものであろう。井戸(SE1)の廃絶儀礼として使用された瓦類は摩滅が進んでおらず、遺構の廃絶時期と瓦の生産時期は近接している。瓦の詳細な時期の断定はできないが、古代末に属するということはできる。これらの瓦は、焼成後時期をおかず埋められた。

母代寺土居屋敷遺跡は、亀山窯の工人集団が形成した屋敷であり、屋敷内からは瓦と須恵器の生産者が自らの生産物(瓦・須恵器甕)と祭祀的な意味を持つ土師器を井戸廃絶時に埋納した祭祀儀礼が確認された。その後、集落の担い手は交代する。12世紀の短い期間に集落が盛行した背景には、院政期の瓦需要の増大とそれに続く古代末の転換期の社会状況が色濃く反映している可能性がある。その背後には、播磨の強い影響と、技術を伝えた工人集団の存在が垣間見えるのである。

#### 参考文献

- 『概説 中世の土器・陶磁器』1995年 真陽社  
『野市町史 上巻』1992年 野市町史編纂委員会  
鐘方正樹『井戸の考古学』2003年 同成社

#### 引用文献

- (1) 『野市町史 上巻』1992年 野市町史編纂委員会  
(2) 松本豊寿「第二章 初期城下町成立の前提的集落 第一節 中世末期豪族屋敷 第二節 中

世末期地方市場集落」『城下町の歴史地理学的研究』1971年

- (3) 『長宗我部地検帳 香美郡 上』1962年 高知県立図書館
- (4) 『曾我遺跡発掘調査報告書』1989年 高知県香美郡野市町教育委員会
- (5) 土器編年については、池澤俊幸「四国における古代後期から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』2004年 日本中世土器研究会を参考にした。
- (6) 『田村遺跡群Ⅱ』第2分冊 2004年 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- (7) 『共同中山遺跡群Ⅳ』2001年 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- (8) 『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』1990年 土佐山田町教育委員会
- (9) 『大東遺跡』2005年 赤岡町教育委員会
- (10) 『下分遠崎遺跡試掘調査概報』1987年 香我美町教育委員会  
『高知県香美郡下分遠崎遺跡(1)』1989年 香我美町教育委員会
- (11) 池澤俊幸氏のご教示による。古代後期から中世にかけて、小皿の口径が小さくなっていく傾向があることが四国内の11～13世紀頃の遺跡の比較によりわかる。前掲⑤同。
- (12) 吉成承三氏のご教示による。
- (13) 『深淵遺跡発掘調査報告書』1989年 高知県香美郡野市町教育委員会  
『平安宮推定大殿跡調査報告書』1983年
- (14) 吉成承三氏のご教示による。亀山窯で生産された須恵器の出土例は、田村遺跡群に1例あるのみであり、それ以外には確認されていない。
- (15) 今里幾次『播磨古瓦の研究』1995年 真陽社
- (16) 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』1993年日本中世土器研究会
- (17) 『栄エ田遺跡』1995年 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター  
高知平野の楠葉型瓦器碗については、近年の発掘調査によって高知市朝倉古墳、香南市クノ丸遺跡など出土例が増えてきた。
- (18) 池澤俊幸氏のご教示による。  
池澤俊幸「四国における古代後期から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』2004年 日本中世土器研究会の中で仁淀川流域の「平高台輪B」の内部に板ナデのある資料についてまとめられている。
- (19) 『深湖北遺跡』1996年 高知県香美郡野市町教育委員会

## 第Ⅵ章 付編 自然科学分析

### 香南市野市町母代寺土居屋敷出土木製品の樹種調査結果

(株) 吉田生物研究所

#### 1. 試料

試料は香南市野市町母代寺土居屋敷遺跡から出土した建築部材9点である。

#### 2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

#### 3. 結果

樹種同定結果（針葉樹2種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の解剖学的特徴を記す。

##### 1) マツ科マツ属 [二葉松類] (*Pinus* sp.)

(遺物No9)

(写真No9)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1~15細胞高のもの、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属 [二葉松類] はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

##### 2) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.)

(遺物No1~8)

(写真No1~8)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からヤヤスキ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

- 鳥地 謙・伊藤隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）  
鳥地 謙・伊藤隆夫「図説木材組織」地球社（1982）  
伊藤隆夫 「日本広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）  
北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）  
深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）  
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代編」（1985）  
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始編」（1985）

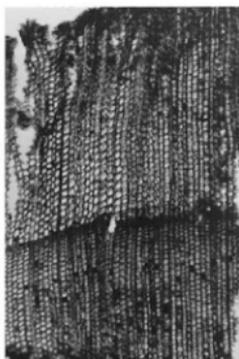
◆使用顕微鏡◆

Nikon

MICROFLEX UFX-DX Type 115

野市町母代寺土居屋敷遺跡出土木製品同定表

No.	出土地点	品名	樹種
1	I 区 SE1 杭 3	杭	ヒノキ科アスナロ属
2	I 区 SE1 杭 4	杭	ヒノキ科アスナロ属
3	I 区 SE1 杭 2	杭	ヒノキ科アスナロ属
4	I 区 SE1 杭 1	杭	ヒノキ科アスナロ属
5	I 区 SE1 北立板 (横木北)	横木	ヒノキ科アスナロ属
6	I 区 SE1 横木東	横木	ヒノキ科アスナロ属
7	I 区 SE1 横木西	横木	ヒノキ科アスナロ属
8	I 区 SE1 横木南	横木	ヒノキ科アスナロ属
9	I 区 SE1 横側 杭	杭	マツ科マツ属 (二葉松類)

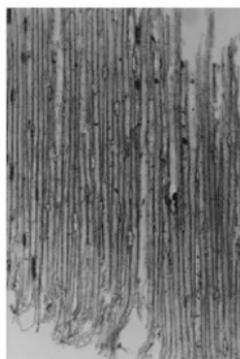


木口×40



柱目×100

No-1 ヒノキ科アスナロ属



板目×40

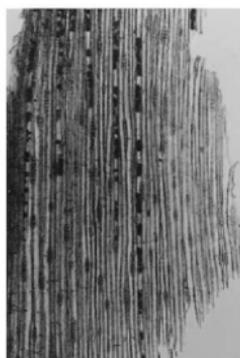


木口×40

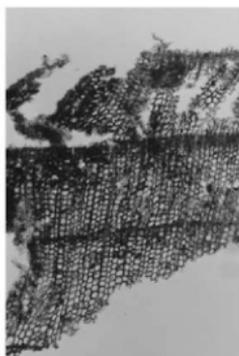


柱目×100

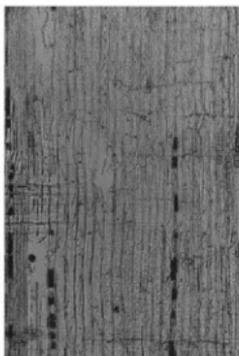
No-2 ヒノキ科アスナロ属



板目×40

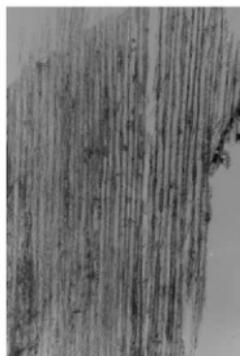


木口×40



柱目×100

No-3 ヒノキ科アスナロ属



板目×40

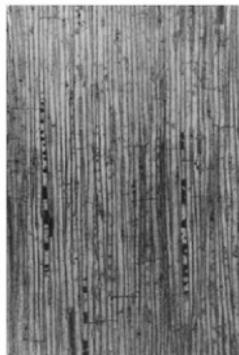


木口×40



柺目×100

No-4 ヒノキ科アスナロ属



板目×40

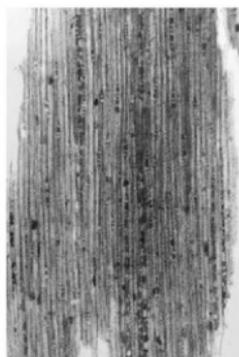


木口×40



柺目×100

No-5 ヒノキ科アスナロ属



板目×40

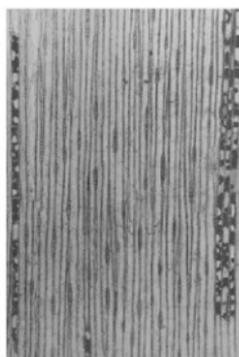


木口×40



柺目×100

No-6 ヒノキ科アスナロ属



板目×40



木口×40



柱目×100

No-7 ヒノキ科アスナロ属



板目×40

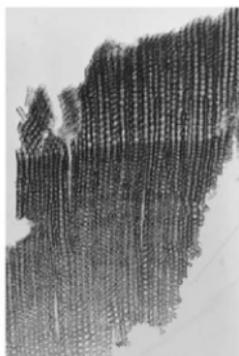


柱目×100

No-8 ヒノキ科アスナロ属



板目×40

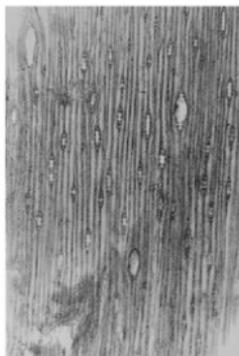


木口×40



柱目×100

No-9 マツ科マツ属 [二葉松類]



板目×40

# 写 真 图 版





南からのぞむ・後方は佐古小学校



北からのぞむ・左後方は三宝山

調査前の景観

図版2



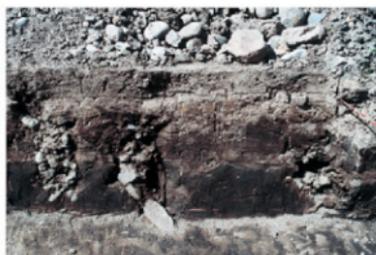
調査前の景観 北東からのぞむ



母代寺遺跡周辺の地形（南上空より）



I区下段 東壁セクション



I区上段 北壁セクション西端



I区下段東壁セクション



I区上段 北壁セクション



I区の遺構（南から）



I区上段の遺構（北から）



I区全景（完掘・北から）



I区上段の遺構（完掘・南から）



P 9



瓦器椀



P 12



S K 7

遺物出土状況



I区SK7よりSE1方向をのぞむ



包含層 軒丸瓦 (521) 出土状況



S E 1 と包含層出土遺物 (軒丸瓦・521)



SE1 1面目遺物出土状況



SE1 2面目遺物出土状況



SE1 遺構底面に敷き詰められた礫



SE1 遺構底面出土礫と下層確認



SE1 完掘 井枠



SE1 完掘 堀形



SE1 完掘 堀形半截 下層確認